

---

# 恋人Lv1

日中まさひろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋人Lv1

### 【Nコード】

N0539M

### 【作者名】

日中まさひろ

### 【あらすじ】

はれて恋人同士になったオレ達。

今までと同じ世界でも、がらりと姿を変えてみせる。

ああ、間違いなくオレは幸せだ。とりあえず、一緒に登校しようと相手を迎えに行っちゃうくらいに有頂天。

けれども、彼女は先に学校へ行ったという。

さて、どうなっていることやら。

シリアス展開？ 鬱展開？ そんな物は犬にでも食わせとけ。

**（前書き）**

お久しぶりです。

もしも覚えていてくださる方がいたらうれしいです。

オレと、斑鳩巴が幼馴染から恋人へとモンスターも真っ青な進化を遂げたのは、つい先日のことだ。

『まあ、アタシはあんたのことが好きだけどさ』

などと、帰りしなにふとした拍子に零れ落ちた巴の本音。

その後にはすぐさま真っ赤になって、

『あつ、いや、ちが……いや好きだけど、じゃなくてあつ、あれっ  
えとその』

とパニックに陥った姿を見ていて始めて、オレは萌えという感情を理解したね。

巴が落ち着くのを待って、オレからも告白の返事をしてはれて恋人同士とあいなったわけだ。

そして今は、一緒に学校へ行こうと思って巴の家に向かっている最中だ。まあ、目の前だから数秒とかからないけど。

「ぴんぽーんと」

呼び鈴を鳴らす。しばらく待つと、玄関のドアを開いて巴のお母さんが顔をのぞかせた。

「巴ならもう行ったわよ」

「へっ」

あつれー、オレたち恋人になったはずなのになんだってうれし恥ずかしの登校シーンがないんだよ。ドラマでもゲームでも定番だろうに。

「そついえば、家の子となにかあったの？ 夕飯のときに突然ニヤニヤしたり、携帯見て気色悪い笑みを浮かべたりしてたんだけど」

「あつ、オレ達、昨日から付き合うことにしたんです」

言ってなかったのかな。にしてもそうか、あいつも浮かれてたのか……やっべ、今オレすげえうれしい。

「まだ付き合っていないかったという事実にびっくりだけど、とりあ

えずおめでとうでいいのかしら」

「うつす、ありがとうございます」

「主人にばれない様にね。大丈夫だと思うけど、娘を嫁に出すときは相手の男は殴り倒すって言ってたから」

「その場合、傷害罪は適用されますかね」

「その前に、窃盗罪を適用すると思うわ」

「泥棒猫って、男にも使うんですかね」

「さあ。ただ、娘を取られたとは言っから  
気をつけておこう。」

「それじゃあ、学校に行きますね」

「はいいつてらっしゃい。巴に帰ってきたら、詳しく話すように言  
つておいてね」

「わかりましたー」

で、学校なわけだが巴がいねえ。

クラスが同じだから、教室にいたやつに聞いたんだが誰も知らない  
ときたもんだ。携帯もつながらないし、どうしたもんか。

と、右往左往しているとチャイムが鳴った。今日も一日、学生のお  
勤めが始まる。

「って、なにさりげなく入って来て席に付こうとしてんだ」

「うへあっ」

チャイムと同時に教室になだれ込んでくるクラスメイトにまぎれ  
て、見慣れた姿を見つけたので早速確保する。

ふふん、今までのオレなら見逃していたが甘いぜ。今のオレの動  
体視力は、狩獵者を上回るね。

むしろ狩人だな。らぶ・はんたーとか言う職業にクラスチェンジ

する勢いだ。

当然、ハンターの異名にかけてがっちり確保するぞ。

「とりあえず、おはよう」

「おっ、おおおッす」

「なにをそんなにあせってるんだよ」

「あっ、あせってないよ。アタシはいたってへいじょうしんさあ」

嘘だ、と叫びたくなる。そんな彼方此方に視線を彷徨わせて手を目だりに振り回してれば、誰が見たって平常心じゃないのはわかる。さて、どう聞き出そうかとしているところでクラスの担任が気だるげな顔で入ってくる。

あまり怒ることのない先生だが、かといって立ちっぱなしというのもまずいな。

「おっとせんせいおはようございます。さあさあ、今日も授業が始まるぞー、みんな席につけー」

お前は委員長か。

しかたない、次の休み時間に聞き出すとするか。そう思っていたんだが、甘かった。

ホームルームの後、五分休憩。

「あっ、巴」

「花を摘みに行ってきます」

一時間目の後。

「あっ、巴」

「花を活けに行ってきます」

ほんとに摘んできたのかよ。

二時間目の後。

「おおっと、花はもうないだろう」

「えっと、あっ、あれは何だ」

「そんなのに引つかかるわけが……」

「全裸の女教師がつ！」

「マジでっ！」

思いつき殴られたんだが、理不尽だと思う。

三時間目の後。

「さて、今度こそ逃がさないぞっと」

「ぬっぬぬ——そこだっ」

「お前は翼君かつ」

スライディングする直前に、スカートの中をばっちり網膜に焼き付けたのは役得としておく。

あれは良い物だ。

四時間目の後というか、昼休み。

オレは、一人さびしく校舎を彷徨っていた。

「さて、まじでどうしようか」

昼休みの教室には、案の定と言うか巴の姿はない。

「嫌われてるわけじゃなさそうだし……かといって、詳しく聞こうにもあそこまで逃げられてちゃんあ」

携帯の電源は切られてるし、本当にどうしようか。

「どこにいるかがわかればなあ……それか、オレのところまで呼び寄せればいいのか」

でもそれが難しい。直接は会えず、携帯も通じない。学校内にいるのは確実だけどどこだか分からないときたもんだ。

「……待てよ」

呼び出しか……ああ、最適な手があるじゃないか。学校ならでの。

「ちょうどいい、ついでだから巴にちょっかいかける奴も封殺しておこう」

オレは、放送室へと向かって足を向けた。

『あーあー、ただいまマイクのテスト中、ただいまマイクのテスト中……なあ、これってキチンと全校に流れてんだよな。良し良し、あとで褒美にアメちゃんをプレゼントしよう』

まっ、巴が出てこないってんなら引きずり出せばいいってこった。それじゃあ、始めるとしますか。

『コホン、えー斑鳩巴ー聞こえてたら大至急に放送室までダッシュしなさい。繰り返し、斑鳩巴ー聞こえてたら放送室まで一分以内に超ダッシュなー』

これくらいで来るとは思ってたない。が、今日のオレは一味違うぞ。今朝からの恋人プレイをできなかった恨みを思い知れ。

『来なかったらこの場で、オレがどんだけ巴が好きなのかを昼休みいっぱい使って暴露大会イン放送室だから。参加資格は巴の彼氏。ってことは、当然ながらオレだけだな。おお、オレの独壇場じゃねーなんだい、後輩。オレは巴の説得で忙しいんだ、くだらない用事なら後にしてくれ。ああ、付き合ってるよ、昨日から。おう、ありがとう』

放送委員の目が生暖かいというか、なんか尊敬とはまた違った目で見られてちょっとゾクゾク。ああ、これが見られる快乐か。

『さーて、そうこうしている間にそろそろ一分だ。さて、巴は間に合うかなー。まあ、間に合わなかったところでまったく問題ないわけだが。全校生徒にオレ達の関係が周知されるだけのこった。むしろそっちの方がいい気がしてきたぞ。全校生徒公認とか憧れるよなよし、やっぱ来なくて良いぞ巴。今からオレが、どれだけラブ関係なのかを懇切丁寧に昼の時間を全部使って話してやろう。食道のあの泥水みたいに不味いブラックコーヒーが売り切れる勢いで甘いトーク炸裂だ。まあ、付き合い始めたのは昨日からだけど幼馴染と

しての期間のも混ぜれば余裕で二十四時間は語れるからな』

『チョット待ってー!』

巴が顔を真つ赤にさせて放送室の扉を開く。意外と早かったな…  
…チョット残念だ。

『あつ、あんたなんてことしてんのよっ』

『何ってお前が逃げるからだろうが。朝は約束してなかったからともかく、学校に来てからも逃げ続けるってどういうことだよ』

『だっ、だって……』

『だって?』

ぶちぶちと何事かをつぶやく巴。

そうして、おもむろに顔を上げて叫んだ。

『どうして良いかわかんなかったんだもん!』

『はっ?』

『だって、恋人だよ恋人。二人つきりになったら甘えた方がいいのかな?』

『いや、別に何時もどつりで』

『授業中とかは時々視線で会話したり?』

『いや、授業を受けようよ』

『メールアドレスは二人の名前を会わせたのにしたほうがいいのか?』

『いや、同じ機種だから無料通話で話そうぜ』

『お互いのあだ名を呼び合ったりもした方が良いよね?』

『いや、名前で良いだろ』

『出かけるとき、手は恋人つなぎにしたり?』

『それは採用で』

まだまだ言いたい事はあるそうだけど、意図は分かった。

『つまり、幼馴染から恋人になったは良いけどもどついう風に接すれば良いのかわかんなかったと』

『……うん』

『お前はバカか』

『バツ、バカじゃない』

『いや、バカだろ。世間一般の恋人がどうだか知らないけど、オレ達はオレ達だ。いきなり何もかも変える必要なんてないだろ』

『そうかな……でも、せつかく恋人同士になれたのに』

『だから、これから色々やってけば良いだろ。手始めに出かけるときは恋人つなぎで。慣れたら、他のこともやってみようぜ』

『うっ、うん……ねえ、アタシ達ってカツ、カカカカカカ』

『阿修羅マンか？』

『カツ、プル、なんだよね』

『そうだよ』

何を今更って感じだな。

『そっか……えへへ、カップルかあ……じゃあさ、その、ちょっとだけそれらしいことをしてみない』

『それらしいことと言つと』

『ちゅー……とか』

こいつはまた、さっきまであんなにパニックってたのにずいぶんと難易度の高い注文をなさる。

が、目の前で自分の恋人が目をつぶって待機状態だ。これで何もしない男がいるか。

いいや、いないね。

『なら……なんだい、後輩。これから濃厚なラブシーンだから、十八歳未満は閲覧禁止だぞ。いや、出てけてここは空気を読んでお前達がだな、ああ放送の事か、知ってるよ』

『ちよっと待って。今、全校生徒に放送が流れてるとか言つた？』

『ああ、言つたよ。電源切つてないからな』

『……』

『巴？』

『……』

『おい、マイラヴアー』

『ギャラッシャー……ッ！』

『本日のお昼の放送は、予定を変更してとあるバカップルの会話を  
お送りしました』

売れたそうだよ、泥水みたいなコーヒー。

さて、改めて学校公認となったオレ達は、それからの日々をそり  
やあもう全力で遊び倒した。

と言っても、今までも友人として行ってたゲームセンターに行っ  
たり、買い物に行ったり、レンタルしてきた映画をどちらかの家で  
見たりとやってることに変わりはない。

ただ、今まで以上に楽しいのは考え方が違うからだと思うんだ。  
幼馴染としてなら、同じ時間を共有している楽しさだった。

恋人同士だと、相手が喜んでいるのもまた楽しいって思った。

本当に、幸せだ。

幸せなんだ。

だって言うのに、そんな幸せは簡単に崩れるんだって、オレ達は  
知らなかったんだ。

冷たい職員室の床に両膝を着いて、無様にオレは懇願する。

「校長先生、お願いします！　どうか、どうかっ！」

「アタシもこの通りに頭をさげますっ！」

「いや、あのね」

困惑した声。たしかに、良識のある大人が、オレみたいな子供に土下座までさせているという状況は外聞がよろしくないだろう。でも、それが利用できるって言うならオレは躊躇せずに使う。そんな手段だろうと、オレは選ぶ。

オレ達にとつて、必要なことなんだ。

これを使い越えなければ、未来はない。

だから、オレは、

「どうか、校長先生っ！ オレ達に追試の機会をっ！」

「お願いしますっ！」

「前代未聞ですよ、デートしたいから追試をさせてくれだなんて」  
「いやだって、ついっつかりと勉強するタイミングを逃しちゃったんだもん。」

おかげで、全教科に赤の字ですよ。オレも巴も。

中には名前を書き忘れたのもあるからなあ。

「交際自体は、まあ、節度をもっているようだから容認することに異論はないですよ。でもね、学生の本分は勉強です」

「はい」

「ごめんなさい」

全面的にオレ達が悪いのは理解できる。だが、それを超えても何とか追試をお願いしないとならない。

オレ達のアバンチュールのために。

「……はあ、仕方ありませんね。今回の補習対象者も少ないことですし、一週間後に追試の機会を設けましょう」

「ありがとうございます」

声をそろえ、オレと巴は深々と頭を下げる。

よっしゃ、あとは赤を回避するために勉強するだけだ。

「ただし」

「へっ」

ほづけた声で、二人して問い返す。なに、追加条件でもあるのか。

「全教科六十点以上。これが条件です」

「おつ、横暴です！ 点数による格差社会反対！」

「そうですね、テストの点だけで人間の価値ははかれません！」

「いいえ、妥当なところだと思いますよ。あなた達の場合、普段から成績があまりよろしくなかったですからね。この機会に、みっちり勉強をやり直してください」

にっこりと、悪魔みたいな笑みを浮かべる。

うわぁ、教師じゃなかったら塩でもぶつけてやりたいところで。

悪魔に塩って聞くのかな。まぁ、清めとか付いてるし似たようなもんだろ。

匿名で塩を送っておこう。

「ぐっ、ぬぬぬぬぬっ……わかりました。巴、行こうぜ。これ以上はまかりそうにないや」

「そね。とりあえず、得意科目から行く？」

「お前は何か得意よ」

「体育の実技」

「ミートウー」

「駄目じゃん」

「お互いにな——失礼しました」

「しっかりと勉強するんですよ」

先生の言葉に、とりあえずオレ達は親指を立てて返しておいた。駄目かもしれないが。

一週間は、お互いの家を交互に行き来しての試験勉強に当てた。さすがに今回ばかりはマジでやってるのでお遊びはなしだ。

そうして、最終日。つまりは試験の前日。

「はぁ、ちよっと休憩入れるか」

見れば、時計の針は夜の十一時を過ぎている。夕飯を食べてからぶつ通しでやってたし、少しは休まないとな。

「そうね。これ以上やると、頭から煙でそう」

「オーバーヒート寸前だよな、実際」

生まれてこの方、ここまで頭を使っただのは入学試験のとき以来だ。

あーマジで頭が痛い。

「ねえ、聞きたかったんだけどさ」

「ん」

お互いのコップに麦茶をそそぎ、片方を差し出しながら巴が遠慮がちに聞いてくる。なんだろ、試験の話なら今は勘弁して欲しい。

「あのさ、何時からアタシのこと、すつ、好きだったのかわかって」  
未だに言い慣れていないのか、巴は好きとかそう言う単語をすっぱりと口にすることができないでいる。

そんなところも可愛いと思うのは、絶対に惚れた弱みだ。悪い気分じゃないけどな。

「んー、何時からだろうな」

始めて会ったときかもしれない。

小学校で同じクラスになったときかもしれない。

中学のときに、ヴァレンティンのチョコをもらったときかもしれない。

高校に入って告白されたときかもしれない。

「正直に言えば、わかんねえや。気が付いたら一緒にいて、気が付いたら好きになってた。本気で意識したのは告白されたときだと思うけどさ、それでもお前と離れ離れになるってのは一度も想像してなかった」

傍にるのが当然な存在。それが、オレにとっての斑鳩巴だった。だからたぶん、出会ったそのときから好きだったのだらうと思う。意識していなかっただけで。

「きつと、お前があおのときに告白してこなくっても、いつかオレからしてたんじゃないかな」

「そっか」

「巴は何時からなんだ」

オレだけ言うつてのも、なんか負けたみたいで悔しいしな。満足げな顔をしているところ悪いが、きりきりとはいてもらおう。

「えっと、言わなきゃ、だめ？」

「聞きたいな、オレは」

巴は案の定、視線を彷徨わせ、少しだけ伸びた髪の毛に指先を絡めたり、くるくると両方の人差し指を回転させたりしながら言葉をさがしてようやく、一言だけをボソッと搾り出した。

「……一目惚れ」

ああ、テストは二人そろって全教科六十点丁度と言う異形を成し遂げて達成しましたよ。

オレ達の夏はこれからだ！

おまけ・ある日の職員室。

「数学の採点は終わりましたか」

「あつ、教頭先生。はい、この通りに」

「例の二人は」

「んー……まあ、ぎりぎり足りませんね」

「どれどれ……いいや、ちょうど六十点ですよ」

「えっ、でも……そうですね。たしかに、ちよつと計算を間違えていたみたいです。直しておきますね」

「いえいえ、人間だれしも間違えるものですよ。では、私は私用で出かけますが後はお願いします」

「はい……あの、高橋先生」

「なんですか」

「あの二人の国語の点数、正確にはいくつでしたか？」

「……五十二点です。表記は六十ですが」

「やっぱり。教頭も甘いですね、相変わらず」

「ははっ。でもまあ、教頭先生の気持ちも分らないでもないですよ。今の時分には珍しいくらいに純情なカップルですから」

「全校放送はやりすぎな気がしますかね」

「確かに。さて、これで全員分の採点終わり、補習者はナシッと」

「こっちもです。どうです、この後、飲みに行きませんか」

「良いですね。酒のつまみには事欠きませんからな」

—  
続く？

（後書き）

コメディ系は、結構さくさく書けますね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0539m/>

---

恋人Lv1

2010年10月8日14時39分発行